

【研究ノート】

## 体育科模擬授業に関する研究動向の分析 —教員養成段階における「リフレクション」に着目して—

竹内孝文\*1・奥村拓朗\*2・伊藤雅広\*2・雲財寛\*2・近藤智靖\*2

\*1 日本体育大学大学院教育学研究科博士後期課程

\*2 日本体育大学

本研究は、体育科模擬授業に関する研究動向を整理することを目的とした。そこで、教員養成段階の体育科模擬授業の研究で扱われている「リフレクション」に着目し、12編の論文を対象にシステマティックレビューを実施した。12編の論文を対象に①リフレクションの対象は何か、②研究方法は何か、③体育科模擬授業後のリフレクションの手立ては何か、という観点から分析した。

その結果、リフレクションの対象については「実践を対象とした行為についてのリフレクション」が多数を占めていた。②研究方法ではすべての研究が質的研究であった。③リフレクションの手立てについては「リフレクションシート」と「反省会」が多数を占めていた。

キーワード：体育教師教育，模擬授業，システマティックレビュー

**An Analysis of Research Trends on the physical education teaching trials  
—Focusing on the “Reflection” in Teacher training course —**

Takafumi TAKEUCHI<sup>\*1</sup>, Takuro OKUMURA<sup>\*2</sup>, Masahiro ITO<sup>\*2</sup>,  
Hiroshi UNZAI<sup>\*2</sup>, Tomoyasu KONDOH<sup>\*2</sup>

\*1 Graduate Student of Doctor Course, Graduate School of Education

Nippon Sport Science University

\*2 Nippon Sport Science University

This study aims to explore research trends on the physical education teaching trials. Therefor focused on the “Reflection” in teacher training course and systematically reviewing was conducted covering twelve articles. Twelve articles on the physical education teaching trials were analyzed in terms of (1) what is the concept of reflection, (2) what kind of research methods are applied for the studies, and (3) what kind of reflective strategies are used after the physical education teaching trials.

The results revealed that (1) concept of reflection in most studies concerned “reflection on action in self-practices,” (2) qualitative research was applied for all researches, and (3) reflective strategies in most studies concerned "reflection seats" and "discussion".

**Key Words: physical education teacher education, mock lesson, systematic reviews,**

## 1. 緒言

近年の教師教育の研究分野では、教師の成長を促すことと関連して、ショーン（1983）の「反省的実践家」という考え方が取り入れられており、なかでもリフレクション<sup>注1</sup>が重視されている。このリフレクションの重要性については特に教員養成段階で確認することができる。日本教育大学協会によると、教員養成段階において育成すべき「実践的指導力」について、教育実践を科学的・研究的に省察（reflection）する力を中軸に据えるとしており（日本教育大学協会，2004，p.10），リフレクションを基軸としたカリキュラムを推奨している。さらに、リフレクションの重要性は、文部科学省（2017）による教職課程コアカリキュラムにおいても示されており、そこでは模擬授業の実施とその振り返りを通して、大学生が授業改善の視点を身に付けることが明確に示されている。このように我が国での教員養成段階では、リフレクションが重視されており、それに伴い大学生のリフレクション能力を検討する際には模擬授業が重要な役割を果たしていることがわかる。

体育教師教育<sup>注2</sup>においても模擬授業におけるリフレクションの重要性は認識されているが、その研究の蓄積は十分とは言えない。

これまでに蓄積されてきた体育科模擬授業に関する研究においては、リフレクションの対象が教師役と生徒役に整理されていないままに進められている傾向がある（例えば、木原ほか，2007）。さらに、教職課程コアカリキュラムにおいて模擬授業と振り返りの重要性が示されているものの、大学生がリフレクションを行うためにどのような媒体や機会が用意されたり、リフレクションの手順が設定されたりしているのか（以下、リフレクションを行うための媒体、機会、手順を含めてリフレクションの手立てとする）といったことについても整理がされていないまま、リフレクションの手だてに関する具体像は示されていないと言える。つまり、教員養成段階での体育科模擬授業においてはリフレクションといってもその具体の捉え方や方法は、各研究者によって異なっているの

が現状である。

また、その点は、学術的な論文においても整理されていないことを指摘することができる。例えば、学術論文の研究方法を見ても、量的研究や質的研究といった様々なアプローチがあり、その研究動向も整理されずに現在に至っている。

このように、リフレクションというキーワードをめぐる、体育科模擬授業におけるリフレクションの方法といった実践面での課題と同時に研究方法の課題の二つが混在しており、こうした状態は、今後、教員養成段階の体育科模擬授業におけるリフレクションの手立ての確立あるいは学術研究の進展の上でも問題であると言える。このような問題意識から、本研究では教員養成段階における体育科模擬授業に関する研究についてリフレクションの対象と手立て、リフレクションに関わる研究方法といった、実践と研究の両視点に着目していく必要があると考えた。

我が国の教員養成段階においては大学生の指導経験の少なさが指摘されており（佐藤，2015，p.86），模擬授業での指導経験は貴重な機会となる。そのため模擬授業での教師役や生徒役に関係なく、参加した大学生のリフレクション能力を育成するための模擬授業の実施が求められる。そのためにも、これまでに蓄積されてきた我が国の体育科模擬授業に関する研究の分析整理を通じて、その評価をしながら、体育科模擬授業に関する研究と実践の知見を得ることが重要である。なぜなら近年の教師教育学分野や体育科教育学の分野においても研究のレビューを行い成果と課題を踏まえて今後の資料を提供することで有益な示唆を与えているからである（例えば、住本ほか，2020；岡田ほか，2021）。

そこで本研究では、教員養成段階で育成が求められているリフレクション能力に着目し、我が国における教員養成段階の体育科模擬授業に関する研究動向を分析整理することとする。教員養成段階における体育科模擬授業に関する研究動向の整理を行うことは今後の体育教師教育の発展に有益な示唆を与えることができると考えた。

## 2. 目的

本研究では我が国における教員養成段階の体育科模擬授業に関する研究動向を分析整理することを目的とした。とりわけ教員養成段階で育成が求められているリフレクション能力に着目し研究を進める。

## 3. 方法

### 3.1 リサーチクエスションの設定

本研究では、以下のリサーチクエスション（以下、RQ）を設定した。RQ1：教員養成段階における体育科模擬授業の研究で扱われているリフレクションの対象は何か。RQ2：教員養成段階で体育科模擬授業とリフレクションを扱っている研究における研究方法は何か。RQ3：教員養成段階における体育科模擬授業の研究において、大学生がリフレクションを行うためにどのような手立てが設定されているのか。

教科教育学では理論と実践の往還が求められている。体育科模擬授業においても研究と実践の両視点からの検討が必要になる。我が国における体育科模擬授業に関する研究において、リフレクションの具体的な方法や、研究の方向性が各研究者に任せられており、整理されずに乱立して行くことは、今後の体育科模擬授業の効果的な方策も研究の方向性が見えないと言える。そのため、教員養成段階における体育科模擬授業について研究と実践の両視点から検討していくために本研究ではリフレクションの対象と手立て、さらには研究の方法といった点に着目して整理をしていく必要があると考えた。

リフレクションの対象や手立てに着目することで、教師役と生徒役の両視点から大学生のリフレクション能力を育成するための体育科模擬授業の実践に関わる知見を得ることができる。さらに、目的にあわせた研究方法を採用することが指摘されている（四方田ほか、2015）ことを踏まえ、研究方法に着目することで今後の体育科模擬授業に関する研究を実施する際に適切な研究方法を示すことが期待できる。以上のことから、リフレクシ

ョンの対象と手立て、研究方法に着目することで、体育科模擬授業について研究と実践の両視点から研究動向を整理することができると考え上記のRQを設定した。

### 3.2 システマティックレビューの手続き

大木（2013）によれば、文献レビューの目的は大きく分けて二つあるとしており、その一つには先行研究を整理し、これからどのような研究が必要かを明確にすることであると述べている。また、文献レビューの中でも、とくに専門性が高いレビューにシステマティックレビューがあるとしている。したがって本研究では上記で設定したRQ追及のためにシステマティックレビューを採用し、体育科模擬授業に関する研究の知見を得ることとした。

システマティックレビューは系統的に文献を収集し、一定の基準と方法に基づいてまとめたものであり、研究成果の情報源として最良のものと考えられている（若村・西村、2020, p.57）。システマティックレビューの手続きは、研究テーマの決定、研究論文の網羅的な収集および選択、各研究のデータ抽出および妥当性の評価、エビデンステーブルへの要約、結果の解釈、結論、定期的更新というプロセスに沿って行われる（卓ほか、2011）。

### 3.3 文献の収集

文献収集は前田（2019）を参考に「CiNii Articles」に掲載されている学術論文の中から、キーワード検索を用いて行った（検索日：2021年3月9日）。キーワードの選定については、藤田（2015）が模擬授業とほぼ同義に用いられてきた用語としてマイクロティーチングを示していることから「模擬授業」と「マイクロティーチング」を採用した。また、リフレクションの対象について検討を行った久保・木原（2013）の研究では「リフレクション」「省察」「反省」「振り返り」「反省的思考」というキーワードを用いていることから、筆頭著者及び体育科教育学を専門とする大学教員

2名とシステマティックレビューに精通した大学教員1名の計4名で協議を重ね「模擬授業 リフレクション」「模擬授業 省察」「模擬授業 反省」「模擬授業 振り返り」「模擬授業 ふりかえり」「模擬授業 振りかえり」「模擬授業 ふり返り」「模擬授業 反省的思考」「マイクロティーチング リフレクション」「マイクロティーチング 省察」「マイクロティーチング 反省」「マイクロティーチング 振り返り」「マイクロティーチング ふりかえり」「マイクロティーチング 振りかえり」「マイクロティーチング ふり返り」「マイクロティーチング 反省的思考」という検索キーワードの組み合わせを用いて文献収集を行うこととした。

その検索結果として適合した216編の文献から重複した50編を除外した166編をベースとした。そこからスクリーニングを行い、学会誌や紀要等に掲載されている学術論文である文献のみを対象にするために42編を除外した。さらに我が国の体育教師教育研究に関する内容ではない84編、教員養成段階の体育科模擬授業を対象にしていない4編、本文に研究方法(収集データ、分析方法、

信頼性・妥当性確保の方略)が明記されていない24編を除外し、最終的に残った12編を対象文献とした(図1)。なお、これらの対象文献は研究の中で体育科模擬授業とリフレクションを扱っているものの研究目的は様々であった。大きく概要をまとめると、研究者が大学生のリフレクション能力を把握することによる模擬授業での教師役経験及び相互作用や模擬授業の実施方略の検討に関する研究が7編(文献番号:1, 2, 4, 5, 6, 9, 10)、リフレクションシートの開発に関する研究が1編(文献番号:3)、保健体育教師のイメージや指導観の検討に関する研究が2編(文献番号:7, 12)、研究者が大学生のリフレクション能力を把握することによるリフレクションの手立ての検討に関する研究が2編(文献番号:8, 11)の計12編であった(表1)。

### 3.4 分析の方法

分析対象となった文献を対象に各RQについて検討するため、それぞれ先行研究を参考に分類することとした。

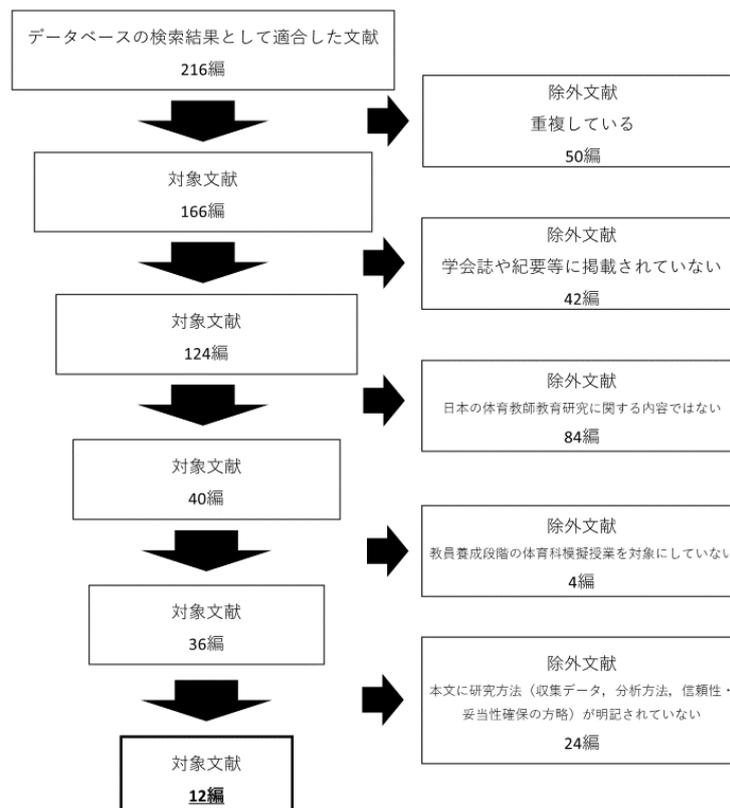


図1 対象文献の選定過程 \*筆者作成

表 1 本研究で対象となった文献の概要 \*筆者作成

番号	文献	文献の概要
1	木原ほか (2007)	模擬授業後の反省会において、大学生が「省察」を通して、どのような解決すべき問題があることに気づいたのかを把握している。
2	日野・谷本 (2009)	大学生相手に行う模擬授業、実際の中学生相手に行う模擬授業、教育実習、の3つの授業において、どのような「省察」をしているか、その構造を明らかにしている。
3	岩田ほか (2010)	マイクロティーチングにおいて、「リフレクション」の焦点をまとめた「リフレクション・シート」の開発を行っている。
4	藤田ほか (2011)	模擬授業において、大学生が教師役を経験することの意義を授業を「省察」するという視点から検討している。
5	浅井・藤田 (2016)	模擬授業において、教員養成段階の保健体育専攻学生が考え得る「指導ことば」の特徴を明らかにしている。
6	藤田 (2017)	模擬授業において、受講生の省察内容の分析を通して教材づくりに焦点を当てた実施方略の効果を検証している。
7	須甲・助友 (2017)	模擬授業とその省察を中核とした保健体育科教育法の前後において、保健体育教師イメージの変容について明らかにしている。
8	川口 (2018)	模擬授業後の協議会において、大学生の「リフレクション」の実態を明らかにしている。さらに、協議会における他者の発言がどのように学生の「リフレクション」に影響を与えているのかを明らかにしている。
9	田井ほか (2018)	模擬授業において、リフレクションノートの量的な分析から、模擬授業受講生の「省察」について検討している。
10	永野ほか (2018)	同一種目の模擬授業において、大学生の「省察」の観点を明らかにしている。
11	大西ほか (2018)	模擬授業後の振り返りにおいて、省察の発話内容に含まれる知識に着目し、模擬授業における協働的な省察の実態を明らかにしている。
12	江藤 (2019)	模擬授業を含んだ指導法に関する講義において、大学生の体育授業の指導観がどのような様態であり、どのように変容するかについて検討している。

RQ1 のリフレクションの対象を検討する際には、ショーンの存在を欠かすことはできない。ショーンが「反省的实践家」という考え方を提唱して以来、我が国でもその考えは広がりを見せている。また、教科教育学では理論と実践の乖離が問題となることが少なくないが近年ではそういった問題に対して理論と実践の往還を目指したリアリティックアプローチを提唱したコルトハーヘンのリフレクションの考え方も広がりを見せている。

我が国の教師教育におけるリフレクションの対象においては、久保・木原 (2013) がこれらショーン (1983) やコルトハーヘン (1985) などの知見を踏まえて図 2 のようにリフレクションの対象を整理している。そこで、体育科模擬授業におけるリフレクションの対象においては図 2 のリフレクションの対象をもとに分類を行うこととした。

RQ2 に示した研究方法の検討については、四方

田ほか (2015) を参考に、(1) 研究アプローチ、(2) 対象者の属性、(3) データ収集方法、(4) 分析方法、(5) 信頼性・妥当性確保の方略の 5 つの視点からなる分析カテゴリーを作成し分類することとした。なお、(5) 信頼性・妥当性確保の方略においては、1 つの文献から複数の分析カテゴリーが記述されてあった場合は、それぞれのカテゴリーに分類を行うこととした。

RQ3 のリフレクションの手立てについては、藤田 (2015) の先行研究に示されている内容を参考に分析カテゴリーを作成し分類を行うこととした。その際に、(5) 信頼性・妥当性確保の方略における分類と同様に 1 つの文献から複数の分析カテゴリーが記述されてあった場合は、それぞれのカテゴリーに分類した。

なお、分析にあたっては文献収集と同様に筆頭著者及び体育科教育学を専門とする大学教員 2 名

とシステマティックレビューに精通した大学教員 1 名の計 4 名の協議による対象文献の分類と分析を実施することで妥当性を高めた。

#### 4. 結果と考察

##### 4.1 リフレクションの対象

リフレクションの対象では、11 編（文献番号：1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 11, 12）が実践

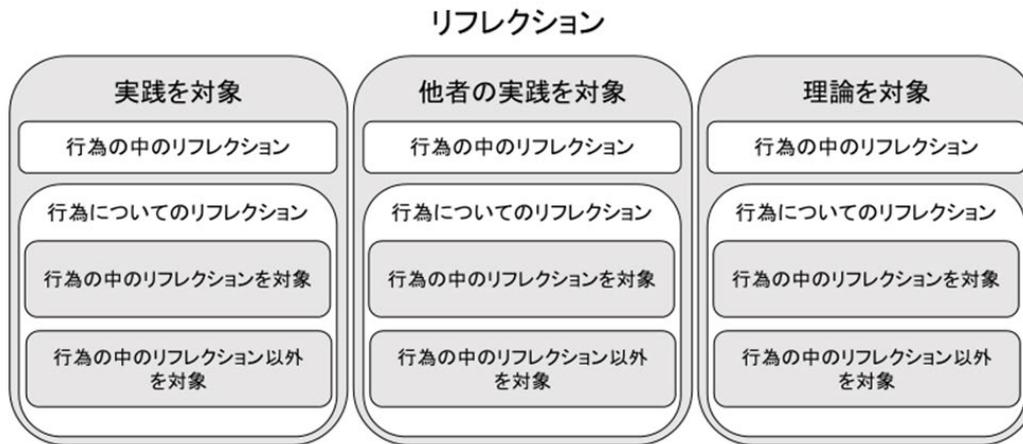


図 2 リフレクションの対象（久保・木原，2013）

表 2 分析方法における分析カテゴリーと定義 \*四方田ほか（2015）を参考に筆者作成

分析カテゴリー	定義
<b>研究アプローチ</b>	
量的研究	数量的データを収集分析し、結果が示されている
質的研究	質的データを収集分析し、結果が示されている
混合研究	数量的データと質的データを収集分析し、両方の結果から結果が示されている
<b>対象者の属性</b>	
体育科教員養成	体育系学部や体育科教員養成課程の学生
初等教員養成	初等教員養成課程の学生
<b>収集データ</b>	
資料	指導計画や指導資料、行政資料、授業日誌、リフレクションシート等による質的データ
発話データ	授業、授業研究会、検討会での発話データ
<b>分析方法</b>	
KJ法	KJ法または質的統合法による質的データ分析
演繹的コーディング	既存の理論枠組みや分析前に設定されたカテゴリーへの分類による質的データの分析
テキストマイニング	テキストマイニングによる質的データ分析
推測統計による検定あり	統計処理を行い、有意差等を示している
推測統計による検定なし	数字やパーセンテージの比較のみを行っている
<b>信頼性・妥当性確保の方略</b>	
ピア・ディプリーフイング	複数の調査者による分析や協議、または調査者のトライアングレーションが用いられている
メンバー・チェック	メンバー・チェック（対象者へのデータの内容や解釈の確認）が行われている
ネガティブ・ケース	否定的な事例（ネガティブ・ケース）が検証されている
分析者一致率	分析者間の一致率（複数の分析者の一致）により信頼性を検証している

表 3 リフレクションの手立てにおけるカテゴリーと定義 \*藤田（2015）を参考に筆者作成

リフレクションの手立て	定義
反省会・意見交換	他者とのかかわりによる反省会や意見交換による振り返りが行われている
リフレクションシート	自由記述式のリフレクションシートによる振り返りが行われている
形成的授業評価	形成的授業評価（高橋ほか，1994）のデータを用いての振り返りが行われている
組織的観察法データ	組織的観察法データを用いての振り返りが行われている
ビデオ視聴	模擬授業の指導映像を視聴しての振り返りが行われている
体育授業観察者チェックリスト	体育授業観察者チェックリスト（高橋ほか，1996）の授業評価による振り返りが行われている

を対象とした文献であり、そのうち9編（文献番号：1, 2, 4, 5, 6, 7, 9, 11, 12）は授業実践者と授業観察者および子ども役学生のリフレクションの対象を区別しておらず自己の実践を対象としたリフレクションと他者の実践を対象としたリフレクションが混在していた。また、他者の実践を対象とした文献は1編（文献番号：8）のみであり、理論を対象とした文献は見当たらなかった。

また、対象とした12編の文献すべてが行為についてのリフレクションを扱っているが、その対象が行為の中のリフレクションなのか行為についてのリフレクションなのかを区別していなかった。

これらの結果から体育科模擬授業におけるリフレクションの対象では、そのほとんどが実践を対象とした行為についてのリフレクションを対象としていることが明らかとなった。これは体育教師教育においてリフレクションの対象を検討した久保・木原（2013）と同様の結果が得られた。

## 4.2 研究方法

### 4.2.1 研究アプローチ

研究アプローチでは本研究で対象となった12編の文献すべてが質的データを収集分析し結果を示している質的研究であった。

英文学術誌における体育教師教育研究の研究方

法の動向を明らかにした四方田ほか（2015）や現職教員の成長に関する研究動向を整理した住本ほか（2020）の先行研究では量的研究よりも質的研究による研究アプローチが多いという報告がなされており、本研究で対象とした教員養成段階での研究アプローチにおいても同様の結果が得られた。

リフレクションにかかわる模擬授業の成果では実施した模擬授業に対する反省および振り返りの内容からリフレクションの特徴や変容について明らかにする（藤田，2015）いわゆる実態把握による研究が蓄積されており、そのため現象の記述や理解、意味の探究が主な目的とされる質的研究のアプローチが採用されていると考えられる。

### 4.2.2 対象者の属性

対象者の属性では初等教員養成を対象とした文献が4編（文献番号：1, 3, 4, 12）に対して体育科教員養成を対象にした文献が8編（文献番号：2, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11）と体育科教員養成を対象にした文献が多かった。

これらの結果は四方田ほか（2015）の結果と同様であり、我が国においても、体育科教員養成を対象とした体育科模擬授業に関する研究が蓄積されてきていることを確認することができた。

表 4 リフレクションの対象の結果 \*筆者作成

リフレクションの対象	文献番号
実践を対象とした行為についてのリフレクション全体	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 11, 12
他者の実践を対象とした行為についてのリフレクション全体	8

n=12

表 5 対象者の属性の結果 \*筆者作成

対象者の属性	文献番号
体育科教員養成	2, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11
初等教員養成	1, 3, 4, 12

n=12

表 6 収集データの結果 \*筆者作成

収集データ	文献番号
資料	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 12
発話データ	11

n=12

#### 4.2.3 収集データ

収集データでは発話データを収集した文献は 1 編（文献番号：11）のみでそれ以外の 11 編（文献番号：1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 12）は全てリフレクションシートといった資料を収集していた。

四方田ほか（2015）及び住本ほか（2020）の研究では、インタビューでのデータ収集が最も多かったことを報告しているが、本研究では教員養成段階を対象にしており、大学での授業後の課題としてリフレクションシートの提出を課していることからこれらの結果が得られたと考えられる。

#### 4.2.4 データの分析方法

データの分析方法では KJ 法が 6 編（文献番号：1, 2, 3, 7, 8, 12）、演繹的コーディングが 5 編（文献番号：4, 5, 6, 9, 11）とほぼ同数の結果となった。また、テキストマイニングによる分析も行われていた（文献番号：10）。

これらは、研究アプローチの結果と同様に大学生のリフレクションを検討する際にテキスト型データに対して、意味の探究や理解を行うために質的データ分析が採用されたと考えられる。

さらに、KJ 法と演繹的コーディングによる分析を行った研究ではそれぞれ質的データを分類し

た後に統計処理もしくはその割合などを示し、数量的データとして結果を示していた。

#### 4.2.5 信頼性・妥当性確保の方略

信頼性・妥当性確保の方略ではピア・ディブリーフィングが 8 編（文献番号：1, 2, 3, 5, 7, 8, 10, 11）であり、分析者一致率が 4 編（文献番号：4, 6, 9, 12）であった。また、メンバーチェック（文献番号：12）、ネガティブケース（文献番号：7）による検証も行われていた。

KJ 法などの質的データを分析する際には、分析者の主観によって分析されることを防ぐ必要性が指摘されており（中畠, 2015）、複数人の分析によって客観性を担保することが求められている。このような指摘を踏まえピア・ディブリーフィングや分析者一致率による複数人の分析による信頼性・妥当性確保の方略が採用されていたと考えられる。

#### 4.3 リフレクションの手立て

リフレクションの手立てでは全ての文献において自由記述式のリフレクションシートが用いられていた。また、反省会・意見交換が 10 編（文献番号：1, 2, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 11, 12）であり、形成的授業評価が 2 編（文献番号：7, 11）

表 7 データの分析方法の結果 \*筆者作成

データの分析方法	文献番号
KJ法	1, 2, 3, 7, 8, 12
演繹的コーディング	4, 5, 6, 9, 11
テキストマイニング	10
推測統計による検定あり	4, 6, 7, 9, 12
推測統計による検定なし	1, 2, 3, 5, 11

n=12（重複データもカウント）

表 8 信頼性・妥当性確保の方略の結果 \*筆者作成

信頼性・妥当性確保の方略	文献番号
ピア・ディブリーフィング	1, 2, 3, 5, 7, 8, 10, 11
メンバーチェック	12
ネガティブケース	7
分析者一致率	4, 6, 9, 12

n=12（重複データもカウント）

表 9 リフレクションの手立ての結果 \*筆者作成

リフレクションシートの手立て	文献番号
反省会・意見交換	1, 2, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 11, 12
リフレクションシート	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12
形成的授業評価	7, 11
組織的観察法データ	4, 6, 7, 11
ビデオ視聴	5, 6, 7
体育授業観察者チェックリスト	11

n=12 (重複データもカウント)

や組織的観察法データが 4 編 (文献番号: 4, 6, 7, 11), ビデオ視聴が 3 編 (文献番号: 5, 6, 7), 体育授業観察者チェックリストが 1 編 (文献番号: 11) などといった客観的データも用いられていた。

コルトハーヘン (1985) は大学生のリフレクションを促す重要な役割を果たすものとして日誌をあげている。さらに、リフレクションシートの開発を行っている岩田ほか (2010) の研究でも確認できるように、大学生のリフレクション能力を検討する際にはリフレクションシートが用いられていることを確認することができた。

さらに、反省的实践家の成長には他者とのかわりが必要である (佐藤, 1997) と示されているように、模擬授業後の反省会・意見交換が実施されていたと考えられる。しかし、反省会・意見交換による振り返りの詳細が書かれていなかった。これらについては、対象文献になった 12 編の論文の概要を見てもわかるように研究目的が大学生のリフレクション能力の育成を図るための模擬授業の検討ではなく、研究者が模擬授業を経験した大学生のリフレクション能力を把握することで模擬授業の意義や教師役の意義を検討する研究がその大半を占めていることを鑑みれば反省会・意見交換についての内容を検討することは困難である。

リフレクションの手立てについて検討を行っている研究 (文献番号: 8, 11) においては、授業者と生徒役による質疑応答などといった内容にとどまっていた。これらを踏まえると体育科模擬授業の後に実施されている反省会・意見交換では渡辺・岩瀬 (2017) が指摘する授業に関して計画とその遂行の仕方の良し悪しを論評するといった従

来型の模擬授業によるリフレクションが行われていることを示している。以上のことから、教員養成段階における体育科模擬授業について大学生のリフレクション能力を育成するための具体的な手立てについては検討がされていないことが明らかになった。

## 5. 本研究のまとめ

本研究の目的は、教員養成段階での育成が求められているリフレクション能力に着目し日本の体育科模擬授業に関する研究動向を分析整理することであった。「CiNii Articles」に掲載されている学術論文の中から、キーワード検索を用いて文献を収集し、12 編の文献を分析対象とした。3 つの RQ から研究動向を検討した結果以下の三点が明らかになった。

1) リフレクションの対象では、実践を対象とした行為についてのリフレクションを取り扱っている研究が多数を占めていた。その中でも、その対象が行為の中のリフレクションなのか行為についてのリフレクションなのかを区別していなかった。

2) 研究方法では、体育科教員養成の大学生を対象としている研究が多く、リフレクションシートの記述に対して KJ 法や演繹的コーディングといった質的アプローチによる研究が行われていた。

3) リフレクションの手立てについては、リフレクションシート及び反省会・意見交換による振り返りが多数を占めていた。また、反省会・意見交換についてはその詳細が書かれておらず、授業者と生徒役による質疑応答などといった内容にとどまっていた。

これら本研究で明らかになった点を踏まえると以下の示唆を得ることができる。

まず、教員養成段階で大学生のリフレクション能力を育成する際のリフレクションの対象については、取り扱うリフレクションの対象が自己の実践なのか他者の実践なのかを区別すること、さらには模擬授業後にリフレクションを実施する際には「行為についてのリフレクション」の対象が「行為の中のリフレクション」なのか「行為の中のリフレクション以外」なのかを区別することが求められる。なぜなら、指導経験の少なさから大学生のリフレクション能力を育成するためには模擬授業ではその効果が限定的である（木原，2010）とされている。このように効果が限られた模擬授業においては、リフレクションの対象を区別することで、育成するリフレクション能力の変容をより限定的に考察することが可能になる（久保・木原，2013）からである。

次に、研究方法においては質的研究によるアプローチと量的研究によるアプローチは体育教師教育研究の両翼を担っており（前田，2019）、それぞれが重要である。しかし、各研究アプローチには課題がみられることも事実である。例えば質的研究においては少数の人々のみを対象に調査を実施することから結果の一般化が制限されるといった点に課題が見られる。また、量的研究においては多数の人々に関する結論を導き出すことから研究参加者が置かれた文脈への理解は限定的である点に課題が見られる（クレスウェル，2017）。このような問題に対して、近年では教育学分野においても量的データと質的データの両方を用いた混合研究法の重要性が指摘されており、混合研究法では両方の方法を同時に用いることでお互いの調査法の弱みを補うことができる（川口，2011）とされている。これらの知見を踏まえると、我が国の体育科模擬授業に関する研究において混合研究法を採用することで、質的データによる大学生のリフレクションの意味内容の理解ができ、量的データによる結果の一般化が可能となり研究結果のよりよい理解をもたらすことが可能になると考え

られる。

そして最後に、リフレクションの手立てにおいては、教師教育学の分野においてコルトハーヘン（2010）のALACTモデルを参考に模擬授業後の検討会を実施する報告（奥村ほか，2020）が散見されるようになり、コルトハーヘンの8つの問い<sup>注3)</sup>を用いてリフレクション能力の育成が行われている。体育科模擬授業におけるリフレクションの手立てにおいて反省会の内容が授業者と生徒役による質疑応答などにとどまっていた結果を踏まえると体育科模擬授業の研究においても、反省会において振り返りの視点を提供し大学生のリフレクション能力を育成するための方略を検討する余地はあると言える。これらの検討については今後の課題としたい。

#### 注

- 1) 本研究では「リフレクション reflection」をふりかえること、ふりかえって深く考えること（熟考）（澤本・田中，1999）として捉え研究を進めていく。
- 2) 本研究における体育教師教育とは、体育及びスポーツを対象とした教師教育のことを意味しており、初等教員養成及び中学校高等学校保健体育科教員養成を含めている。
- 3) コルトハーヘン（2010）のALACTモデルは、行為、行為の振り返り、本質的な諸相への気づき、行為の選択肢の拡大、試みという5つの局面から成っている。第1局面の行為に対して、第2局面である行為の振り返りでは、有効な具体化のための質問として、「1. あなたは何をしたのですか？」「2. あなたは何を考えていたのですか？」「3. あなたはどう感じたのですか？」「4. あなたは何をしたかったのですか？」「5. 子どもたちは何をしたのですか？」「6. 子どもたちは何を考えていたのですか？」「7. 子どもたちは何を感じていたのですか？」「8. 子どもたちは何をしたかったのですか？」の8つの問いが示されている。

## 引用文献

- 浅井雅大・藤田育郎（2016）「教員養成段階の保健体育専攻学生が用いる「指導ことば」の特徴 - e-Learning による体育模擬授業のリフレクション課題を通して - 』『信州大学教育学部研究論集』(9), pp.71-79.
- Donald A. Schön（1983）The Reflective Practitioner : How Professionals Think in Action. Basic Books.
- 江藤真生子（2019）「小学校体育授業の指導観の変容に関する事例研究 - 養成段階の学生を対象とした教科の指導法に関する講義に着目して - 』『日本教科教育学会誌』42(3), pp.83-94.
- 藤田育郎・岡出美則・長谷川悦示・三木ひろみ（2011）「教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討 - 授業の「省察」に着目して - 』『体育科教育学研究』27(1), pp.19-30.
- 藤田育郎（2017）「教材づくりに焦点を当てた体育模擬授業の実施方略に関する事例的検討』『体育学研究』62(2), pp.1-15.
- 日野克博・谷本雄一（2009）「大学の模擬授業並びに教育実習における省察の構造』『愛媛大学教育学部保健体育紀要』(6), pp.41-47.
- 岩田昌太郎・久保研二・嘉数健悟・竹内俊介・二宮亜紀子（2010）「教員養成における体育科目の模擬授業の方法論に関する検討 - 「リフレクション」を促すためのシート開発 - 』『広島大学大学院教育学研究科紀要』(59), pp.329-336.
- ジョン W. クレスウェル（抱井尚子訳）（2017）『早わかり混合研究法』ナカニシヤ出版.
- 川口諒（2018）「体育教員養成課程の模擬授業における学生の「リフレクション」の実態に関する事例研究 - 他者の実践を対象とした協議会における「リフレクション」に着目して - 』『広島大学教育学研究科紀要』(67), pp.259-268.
- 川口俊明（2011）「教育学における混合研究法の可能性』『教育学研究』78 (4), pp.386-397.
- 木原成一郎・村井潤・坂田行平・松田泰定（2007）「教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究』『広島大学大学院教育学研究科紀要』(56), pp.85-91.
- 木原成一郎（2010）「模擬授業の意義と成果」梅野圭史・海野勇三・木原成一郎・日野克博・米村耕平編著『教師として育つ - 体育授業の実践的指導力を育むには - 』明和出版, pp.40-42.
- コルトハーヘン, F（武田信子監訳）（2010）『教師教育学理論と実践をつなぐリアリスティックアプローチ』学文社. (Fred A.J. Korthagen（2001）Linking Practice and Theory)
- Korthagen, F. A. J. (1985) Reflective Teaching and Preservice Teacher Education in the Netherlands. Journal of Teacher Education, 36 (5), pp.11-15.
- 久保研二・木原成一郎（2013）「教師教育におけるリフレクション概念の検討 - 体育科教育の研究を中心に - 』『広島大学大学院教育学研究科紀要』(62), pp.89-98.
- 永野翔太・田代智紀・寺田進志（2018）「体育分野における同一種目の模擬授業に対する「省察」の観点 - ハンドボールを事例に - 』『東海学園大学教育研究紀要』(4), 59-66.
- 中島洋（2015）『初学者のための質的研究 26 の教え』医学書院.
- 日本教育大学協会（2004）教員養成の「モデル・コア・カリキュラム」の検討 - 「教員養成コア科目群」を基軸にしたカリキュラムづくりの提案 - , <http://www.jaue.jp/chosa/iinkai.html>. (2021年8月17日閲覧).
- 前田一篤（2019）「日本の体育教師教育研究における研究方法に関する一考察 - 研究アプローチとリサーチクエスションの関係性を手掛かりに - 』『広島大学大学院教育学研究科紀要』2 (68) : pp.253-260.
- 文部科学省（2017）「教職課程コアカリキュラム」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/126/houkoku/1398442.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/houkoku/1398442.htm). (2021年10月13日閲覧).
- 岡田悠佑・根本想・乳井勇二（2021）「英文学術誌掲載論文における「パラリンピック」に関する

- る研究動向」『スポーツ教育学研究』41 (1), pp.1-14.
- 大木秀一 (2013) 『看護研究・看護実践の質を高める文献レビューのきほん』医歯薬出版株式会社.
- 奥村好美・伊藤博之・松本伸示・溝邊和成・宮田佳緒里 (2020) 「より深い省察を促す模擬授業検討会のあり方に関する一考察 - F. コルトハーヘンの ALACT モデルを参照して - 」『兵庫教育大学研究紀要』57, pp.85-94.
- 大西祐司・股村美里・高松靖・安倍健太郎・黒澤寛己・川合英之・谷川尚己・柴田俊和 (2018) 「体育科模擬授業における協働的な省察の実態 - 発話内容の知識の頻度に着目して - 」『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』15, pp.23-32.
- 佐藤学 (1997) 『教師というアポリア - 反省的実践へ - 』世織書房.
- 佐藤学 (2015) 『専門家として教師を育てる - 教師教育改革のグランドデザイン - 』岩波書店, p.86.
- 澤本和子・田中美也子 (1999) 「教師の成長とネットワーク - 「授業」でつなぐネットワーク - 」藤岡完治・澤本和子編著『授業で成長する教師』ぎょうせい, pp.127-137.
- 須甲理生・助友裕子 (2017) 「保健体育科教職志望学生における保健体育教師イメージの変容 - 模擬授業とその省察を中核に展開した教科教育法の前後に着目して - 」『日本女子体育大学紀要』47, pp.49-63.
- 住本純・岡出美則・近藤智靖 (2020) 「現職教員の成長に関する研究動向の分析 - 1997 年～2018 年を対象に - 」『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』3 (2), pp.345-360.
- 田井健太郎・河合史菜・元嶋菜美香・久保田もか・高橋浩二・宮良俊行 (2018) 「教員養成課程における模擬授業の省察に関する研究」『長崎国際大学論叢』18, pp.31-46.
- 高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎 (1994) 「体育授業の「形成的評価法」作成の試み - 子どもの授業評価の構造に着目して - 」『体育学研究』39 (1), pp.29-37.
- 高橋健夫・長谷川悦示・日野党博・浦井孝夫 (1996) 「体育授業観察チェックリスト作成の試み - 観察者の評価観点の構造を手がかりに - 」『体育学研究』41 (3), pp.181-191.
- 卓興鋼・吉田佳督・大森豊縁 (2011) 「エビデンスに基づく医療 (EBM) の実践ガイドライン - システマティックレビューおよびメタアナリシスのための優先的報告項目 (PRISMA 声明) - 」『情報管理』54 (5), pp.254-266.
- 若村智子・西村舞琴 (2020) 『はじめて学ぶ文献レビュー』総合医学社, p.57.
- 渡辺貴裕・岩瀬直樹 (2017) 「より深い省察の促進を目指す対話型模擬授業検討会を軸とした教師教育の取り組み」『日本教師教育学会年報』26, pp.136-146.
- 四方田健二・須甲理生・岡出美則 (2015) 「英文学術誌掲載論文における体育科教師教育研究の研究方法の動向 - 2002 年～2011 年の 10 年間を対象として - 」『体育学研究』60, pp.283-301.